都立志村学園

「継続は力なり」を体得

知・肢ともに進路実現100％

学校訪問

都立知的障害特別支援学校41校のうち、就業技術科があるのは5校。志村学園は高等部就業技術科と、小・中・高等部の肢体不自由教育部門の併置校として、2013年4月に開校した。「継続は力なり」を校訓に、一人ひとりの自己実現を図り、卒業後も見据えた児童・生徒のQOLの向上を掲げ、教員と行政職員が一丸となって取り組んでいる。夏休み前の一日、学園を訪れてみた。

学内で本物の就業体験

志村学園で驚くのは、開校5年目とは思えぬ奇麗な校内だ。廊下ではモップを持った生徒が元気よくあいさつしてくれ、清掃は授業の一環。堀内省剛統括校長は「一番の自慢」という倉庫に案内し、「奇麗な環境を整えれば、生徒はすぐに吸収し、当たり前にやれるようになり、彼らのプライドにもなる」。4S（整理、整頓、清潔、清掃）の精神を徹底させていることがよく分かる。

市民講師の指導を受けて調理を行う食品加工コースの生徒

就業技術科は流通・サービスと家政・福祉の2系列に分かれ、それぞれに2コースがある。生徒は全コースを経験し、2年次後期から自らのコースを選択。企業就労を目指す。どのコースでも作業に即したデータ管理をパソコンで行い、情報処理の基本的な知識・技術が学べる。教室の外にはタイムレコーダーがあり、出退勤が自然に身に着くようになっている。

校内のカフェレストランは、食品加工コースの生徒たちの実習の場だ。一流ホテルと同様の接客サービスが身に着き、厨房は専門家が指導。レストランは予約ですぐに満杯になるが、取材の日はカフェを営業中で、肢体不自由の子供たちがテーブルマナーを学ぶ体験の場ともなっている。

介護・コミュニケーション・コースでは、介護やホテルの接遇などを学ぶ。ホテル実習室は調度品も本物で、客室そのもの。ベッドメイキングや清掃を実習する。福祉施設を模した実習室では、理学療法士が介護技術を指導していた。フランス料理のシェフやホテルマン、理学療法士など、市民講師は7人。「教員は経験則でここまでと思ってしまうが、市民講師は限界を決めないで、子供の力を引き出してくれる」と、開校前から開設準備担当として堀内校長と学校づくりに尽力した菊地直樹主幹教諭。

山本進主任教諭は、カフェレストランのお客様からのアンケートを基に振り返りを行い、「BGMやコーディネートも生徒が担うので、その努力がお客様に伝わっているのが分かると、頑張る気持ちにつながる。皆が意見を出し合って改善できるよう、考えさせる時間を十分に取っている」と話す。

介護・コミュニケーションとしたのは、介護はチームで協力し合うことが必要だからだ。「声を掛け合うなどコミュニケーションが利用者を守ることにつながる」と古屋文代主任教諭。

高等学校から同校の公募に応じた山本教諭は「パソコンや各種検定など多くのスキルを身に着けて就職してほしいと思ったが、臨む姿勢は普通科の高校生以上だった。時間をかければ内容を変えなくても吸収してくれる。ハイ、と返事ができる素直さが力に結び付いていると思う」と語る。

教職員はロールモデル

肢体不自由教育部門の上肢下肢訓練室では、教員と外部からの自立活動指導員が自立活動を行っていた。同指導員は11職種19人に及ぶ。新井洋子主幹教諭は、子供の12年間を見据えて様々な工夫を凝らしながら積み重ねていく「基礎になる大事な取り組み」と話す。

「みな素晴らしいので、一人ひとりが個性を発揮できるようになれば」。波多野裕子主任教諭も「1人の子供について、いろいろな意見を聞きながら皆で育てていき、手応えが出てくるとやりがいを感じる」と言う。

広々とした廊下は歩行訓練に最適。教職員には子供たちのロールモデルになることを課しているだけに、「物を置いたままにはしない」と4S精神を徹底させている。

同校が「児童・生徒の人権」を基盤に置いていることは、ジャージなどでなく標準服を着用し、全てのトイレに個室スペースが設けられていることにも表れている。開設準備の段階で、可能な限り設計に修正を加えてもらったという。

肢体不自由教育部門の中学部訪問学級の入学式。生徒宅を校長・副校長らが訪ねて行う

行政職員の協力が力

目指す学校像を、▽学校教育を通して児童・生徒のQOLを向上させる学校▽特別支援教育の専門性において全国トップレベルの学校とし、「その実現には、行政系の職員の協力なくしては成し遂げられない」と強調する堀内校長。

給食でも「特別支援学校のトップレベルを目指す」と話す経営企画室の渡會勲課長代理は、栄養士として約480食の給食を提供する。高齢者と同じではないかと思われるが、「全く逆で、持っている機能を生かして更に発達させるハビリテーションの考え方」と言い、実際、飲み込む機能の発達期から押しつぶし練習期、咀嚼（そしゃく）機能の発達期まで5段階に分けて調理。

「これだけの施設と環境を与えられ、やりがいを感じる。食事の面から社会に出る子供たちの背中を押したい」

鹿山健治経営企画室長は、情報共有に力を尽くし、平素はもとより災害時に備え、停電時の太陽光発電の利用方法やエレベーターのセーフティー機能などのマニュアルを作成した。「教育理念を共有し、QOLの向上のため、学事や環境整備の面で質的向上に寄与していきたい」と話す。

追指導でもQOL向上を

「児童・生徒一人ひとりが入学して良かった、学んで良かった」と言える学校を目指し、希望する進路先への移行率100％を実現。卒業後のQOL向上のために継続教育も実施し、3年間の追指導を行っている。今後は生涯にわたってプラットホームとしての存在となるよう、親の会とも連携を図っているところだ。

「障害の状態などにより通学したくてもできない子供が7人いる」と訪問学級の児童・生徒にも思いを巡らせる校長。ここにも志村らしさが表れ、学校歯科医も自宅を訪問し、入学や卒業の節目には校長と副校長が訪問して式を行うという。

堀内校長と菊地主幹教諭にとって、同校は共に命を吹き込んできた宝物のような存在。「やれば出来ると自己有用感を実感でき、自分の活躍できる場があることで、どんどん表情が輝き、声が明るくなっていく。どんな困難があっても、努力することによって結果が変えられるのだと、子供たちはまさに継続は力なりを体得している」

入学してくる児童・生徒には、過去に傷ついたままの子供も多い。「前は先生にしか相談できなかったけど、この学校では友達に相談できると書いてあったり、卒業文集は本当に感動的」と言い、「皆、夢を描いて卒業していく。夢が持てることは大きい」と2人。「完成形を描いているので、あと5年はやりたい」と堀内校長の夢は広がる。